

夏季  
能古博物館だより



能古博物館の一部「仮称・能古古窯とその発掘品」3種。左から青磁碗、染付碗蓋、高取茶碗。  
(注)本古窯は諸説あり、未知多々包蔵する。

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝(十六) 庄野寿人

- ・日記に見える昭陽の年齢
- ・昭陽の学力・全国に知られる
- ・後嗣鉄次郎・結婚と城内出仕

本誌前号の冒頭記事に、昭陽没年

を天保七年五月十七日己亥戌刻(みのい・いぬのこく)、今の午後八時頃、享年六十で死去とするが、これは筆者の誤り「享年六十四」である。よって訂正とお詫びいたします。

本文記事を続稿します。

文政十二(二二)四年の二月五日赤星

俊哲(南冥の弟子で儒医)が酒と魚を持参。新婢鶴入る。(新しく女中を雇う。名はつる)

六日。敬(昭陽の二女で母方の実家「五島屋」を嗣ぐ)が三児と女中一名を連れ、新年の鮮鯛と酒、鯉節を持参、供の丁稚・忠大と忠吉に酒を出す。

七日。女中一名が正月帰省する。鉄次郎(暘洲のこと)は伊崎の叔父山口白賣方に出向く。

八日。塾始めに尚書を講ず。

九日。生月の又右衛門より鯨鮓一卷と熬腸一籠が到来。長婿(長女少栗の婿・雷首のこと)から諸と芹届

く。

十日。友也(少栗)と紅児(少栗女子)来る。

十一日。又兵大蛤の苞を持参。

十二日。友と敬揃ひ来る。鉄次郎衣非組頭より月俸券受領(当月分より藩財政の節減により年二俵を控除される)。

亀井家給禄の十五人扶持(一人扶持は年に米五俵)は、大の月は四俵一斗一升五合。小の月は四俵六升八合(一俵は三斗三升)である。これに年

二俵の節減分を当月から差引かれる。十三日。内氏(妻のこと)栗林に年賀、茶包持参。これに昭陽も三百文を添える。栗林は妻の稽古師匠。

十四日。元琳、黄溪の詩稿二十余枚を大いに削る。安倍文雄詩稿に削除(改訂指導をすること)を求め、

これに銀子を添え来る。

此日、次第大荘(太宰府に住す)の二回忌なり。鉄次郎と黄溪、今宿少栗方に行く。

写真 杉山 謙

能古博物館だより

十五日。黄溪婦り来る。

十六日。安次郎帰塾、南金二分と白糖一兩持参。強平、友石も帰塾酒三升。

十七日。伯子五年忌。英作諸生と饌具を供える。強生酒一升凍腐供進。

註||伯子は昭陽甥の山口駒太郎なり。

十八日。千里来り鮮魚・酒受ける。

十九日。左伝續考再講五卷四百七十頁を卒業。友也誕生日餅を作る。

廿日。隊伍会(昭陽が属する城代組の会合)不参をことわる。

廿一日。阿鉄と伊八妻来る(昭陽家の旧婢)。司(つかさ)来り詩稿に改訂を求め二朱金を受ける。

廿二日。司の文稿を削る(改訂をいう)弥平酒二升持参。篠田莊太郎(藩医家の子弟)南金(一兩の四分の一)と海苔を謝礼に置く。

莊周考二卷を了し製本する。万年に三步金を貸す。

廿三日。与八に二歩を貸す。武折篇を修稿。

廿四日。宮崎春亮入塾二分銀を束修する。

廿五日。風雨迅雷。寒疾により机を離れる。秀也清書を以て来り、これに署名を与う。少栗と紅児来る。

廿六日。岩国藩の三書生来る。宇都宮了安二分金を呈し、字書七紙を

乞う。吉川侯(岩国藩主のこと)に献ずる由なり。なお方金八片(二兩をいう)謝金とす。

唐人町成道寺に三百文を呈す。

廿七日。岩国に求められる字書を三生に交付。少栗又餅を作る。

廿八日。少栗婿の源吾松露を持参。夜、左氏会同を講堂にする。

廿九日。紅児帰る。

晦日。長太夫来る(長太夫は井原村の亀井親戚)。鵬溟が葱と野蜀葵を持参。

三月  
朔日。敬(昭陽二女で母実家の姪浜五高屋を嗣ぎ上原助次郎を夫に迎える)干魚かなぎ、鍼魚を持参。

二日。先考(父南冥のこと)十六年忌なり。午牌門生と玄冲、司と馬輔(この二名は南冥の医弟子)線香、焼麩を奠す。外生(通学生)は香典包を供す。肱臥(義弟の山口白賈)と博多生民(南冥医術の高弟、博多に開業する)各自奠進。平蔵葱一束。

三日。僧鑑、酒来る。弘景、鈔百五。

四日。早朝より机を離れず。茂助二方金(半兩)を返す。京屋十兩を借りる。

五日。銀会(頼母子講のこと)三錢を榮作妻借る。昭陽、著作中の續

考大いに進捗(三十冊下、一二七頁、補考一冊七八頁)自筆清書終わる。

六日。友紀(内書生)修業を終え帰郷す。金二分(半兩)謝金。

妻、今宿に行き、長石村の藤五母と会す、婚事(三女・世の縁談)なり。

宮崎省吾郎、石橋敬助入塾。源吾吉報をもたらず。夜会講する。

七日。二生一方(一分銀、一兩の四分の一)を束修。紋、駄持参(駄は小さい瓜をいう)。茂助、今宿に走って五鯛饅頭を長石の客に贈り、源吾は酒する。元濤、酒肴を送り基小学故と為す(此行の意味不明なり)。

玄免茶二袋を送り潤ほす。徳次、白蛤を送り。夜糲を搗く。

八日。大乘寺、糖蜜を送る。後藤元常、酒と大魚を送らる。

九日。内氏(妻のこと)京佳文をまわり又三團(団は円・即ち百錢のこと。この場合の錢は四文とする)を増す。

岡野東次郎、鯛を送らる。

十日。八重来る。

十一日。初めて門を出る。

十二日。妻今宿に如く。衣非氏に行く。人を今宿に走らす。

十三日。豪潮作めくり来る。三国喜六に貸す。

十四日。長沢儀八に往き娘を請う。

山人走るなり。

十五日。忠吉、伊平に考あり、友平婦り遅し。

十六日。春甫来り唐紈扇、香茸と芬半切を貽らる。

十七日。孤卿氏に往く。良駿来り若松二升を貽らる。

十八日。鉄次郎、親事願状を下り今日玄桂を以てするに遅々として果さず。

十九日。山人(雷首のこと)書幹を持ち朝早く孤卿司城に往く。栗林より三人来る。元瑛、元琳来り、茶二袋を祠堂に奠す。酒三升と鶏九を余におくられる。

二十日。道也、山人を以て束を回らし婦り来る。詩賛三を作し書して源左衛門太夫に賀す。

廿一日。三坂村甲長来り、今日を以て玄桂の願状を郡役に赴ける。

註||廿、廿一日記事は、十八日の鉄次郎の親事(結婚)願状にかかわることである。

廿二日。願状を司城に上す。(提出したの意)。三元過(二句を過ぎ)遊びが多く昭陽は案じている。

廿三日。春亮、塾に帰り蛭をもたらす。

廿四日。友、紅児(少栗親娘)来る。

廿五日。友は急に帰る。山人来り

内氏(昭陽妻)と姪浜の阿幹(おかん)のことで往く。

吉太郎が筍と蕨を持参。左平が大蝦を持参。

廿六日。内氏、姪浜より帰宅。玄節が回って来り字書を乞い鈔(藩札)を謝とする。

廿八日。目覚めて机を離れず。夜机に就き、そのまま仮眠の状態であらう。鉄次郎願書が月番家老に届いたことを組頭(衣非氏)に報告しておく。

廿九日。平蔵が独活(うごぎ)の若芽)と芹(せり)を持参。文四郎(わづら)が蕨(わづら)を、金兵衛から酒肴が届く。内氏姪浜に往く。

#### 四月

朔日。内氏が友と紅児を伴ない帰る。井原の茂助が銀廿錢くれる。

二日。強平(はしがら)が干鰯(ほしぐれい)を持参。

三日。内氏、世(昭陽の三女)と香椎宮に詣り金一分(一両の四分の一)を供進する。

註||三女「世」の縁談に円満進行を祈願したのである。左太夫が来り、昭陽これに酒を出す。

四日。神頼(姓・かみより)生、入塾。南金(一分銀をい)と酒二升を束修とす。また圓鏡となお塾中に銀五錢を出す。得信坊(修験者・

山伏のこと)来り蛙鴟粉(註||蛙鴟粉の意不明)くれる。

九霞楼の需める二絹一紙に寄題を作し詩書を揮ふ。光徳寺来り、茶と仙人膏をおくられる。

五日。土州(土佐)の生田十次郎見え、小銀(二朱銀のことか)を以て字書を需む。

六日。深恵より独活(うごぎ)送られる。

註||深恵は怡土郡辰ヶ橋の瑞梅寺住職。亀井一家に親しむ。昭陽・少栗日誌によく登場する。山水画を良くし名作を残す。

七日。去る五日に見参の土州十次郎に書を揮い其帖を贈る。

註||其の帖とするのは書法帖を作ったものか。

鉄次郎と孤卿君の招きに応じ往く。

孤卿君は使者をして酒二升と鯡魚三を賜り、余を選郎君に会せらる。

八日。孤卿君に拝謝し鮮鯛三口を呈す。左太夫、再び煤鱗を以て来り飲む。只助を呼び供に飲む。

九日。敬来る。玄冲、鯛二、酒二升を送られる。併せて只助にも酒二升送る。

十日。黄溪、枸杞茶に手紙を添え送られる。谷坂才右より酒と鹿肉煮(か)が届く。神頼圓鏡入塾。

十一日。退叔、焼鹿肉を送り来る。良才二分金を返戻。これに名碗を添

える。安兵衛、切昆布一俵を持参して帰塾す。

十二日。音九郎書幹を以て少栗書を求め酒代、三分金を添える。健吾若松酒二升を持参。昭陽、衣非組頭を訪う。

十三日。廣江吉蔵、酒を持参し字を需める。威八郎叔父海參一函送り来る。月海上人、索牛杯と洛酒を送らる。

十四日。紅児(少栗の一女)来り後れて山人(父雷首)も来る。

十五日。少栗来る。

十六日。友と紅児帰る。大琛、南金を添え詩稿批正を求む。大乘、筍を送りくれる。

十七日。大琛と大乘詩稿を削り返す。重左エ門より乾蕨を送らる。

珪蔵方金(一分金)と酒、茶を送りくる。

十八日。大哲、一朱を以て字書を乞う。

十九日。河村泰安、若松酒二升。廣井例介、南金(一両の四分の一)と酒二升を送り来る。重左エ門来訪あり、飲酒を供して夜を徹す。

二十日。玄冲に菓を乞い、隊伍会出席を謝す。昭陽、疲勞をいう。

註||十九日の重左エ門酒供による不眠のせいであらう。

廿一日。婢「はる」の母来るに六十錢を交す。

註||この六十錢(文のこと)を当時の米価一升四十四文で勘案すると米にして約一升三合六勺に相当する。

廿二日。長年から浪花酒二升届く。

廿三日。正葉。内氏伊崎に行く。

廿四日。鉄也。孤卿氏に往く。

註||廿三日の内氏伊崎行くと、本日の鉄也行動は、本人の結婚話進行と思われ

る。

廿五日。与八が塾舎の風害修繕に遠地大工を備い、その仮泊させるため、書生寮の一室使用を認む。夜、司馬助の修了に別離の小宴を催す。齊熊来って泊まる。

廿六日。与八に酒二升を持参。

廿七日。干うどん二束を与八の使役大工夜食に与える。大工平蔵持参の干小鱈(ほ)を贈りくれる。

廿八日。与八に鯨腸(干しもの)を与える。

廿九日。矢野老太夫(家老の隠居)来訪あり。玄桂来り茶を貰う。道祐来り一団一方(金額不詳)を貸す。晦日。強平二団、元良に三分を貸す。

五月

朔日。登拜(孔子像を拝すること)明爽を感ず。与八が活鯛(い)を供す。

二日。福竹武左エ門、鯛と酒を以

### よ り だ 館 物 博 古 能

号 29 第 (3)

## 能古博物館だより

て字を乞う。木村治三郎、大鯛をく  
れる。束紙一束、浪花より送らる。

三日。香江健吾、鯛及び酒を以て  
字書を乞う。強平に貸す二團かま回る。

豊前本須賀蓮光寺、果一箱送來、関  
洲書の借覽を乞わる。

四日。大乘文稿の改削を求められ  
るも一役(ひと仕事)あり。

五日。内書生十九人、賀酒と南金  
三片(三分か?)を供さる。弘景賀

鈔百五。豊屋(生月捕鯨益富氏の商  
号)又右より長尾羽二、骨切廿。鉄

次郎佳祝(結婚成立のことか)を賀  
すと。これに己三郎より鯨一卷、酒

一升を以て余の潤筆を求む。友、紅  
児來り鬼蝶胡豆を賀す、と。山人

(雷首のこと)簡明目録を写しこれ  
を装釘せんと送り來る。

六日。孤卿氏に如く。玄冲が酒肴  
を送り來る。また友、紅児に酢すし作る。

七日。友と紅児かえる。牙城(衣  
非組頭のこと)城命あり、二十四時

(終日をいう)整列して陸路を番す。

八日。太郎次(姪浜の石橋氏当主)  
家製の醬油五升くれる。鉄次郎、書

生と祖父南冥の墓を洗う。

九日。八木春林、魚に若松一升を  
添え字書を乞う。直ちに揮う。

(二分金と一分南鐮銀のことか)を  
潤筆とす。又、内氏に一南、綿布を  
鉄也、一南一朱を世と宗におき送別  
詩とし、二人の為に揮う。

十一日。石工、王考(父南冥)墓  
に漆銘を正しく聖ける。友と紅児來  
り供えるに三品(野菜類)を載す  
(つやつやく飾ること)。

十二日。王考遠忌(祖父聴因の五  
十年祭)を為す。よって祖父位牌と  
祖父生前愛用の徳利に銘酒「若松」  
を一升七合余を詰め、その他所要具  
と供物類を、祖父生前の親近者強平  
と平蔵兩人の好意を受け崇福寺に運  
搬を頼んだ。

崇福寺は、昭陽叔父(父南冥弟)  
の曇栄が早く出家し修行後は崇福寺  
住持に出世、退任後は同寺塔頭の永  
樂寺隠居として物故という因縁があ  
り崇福寺からは前任縁故として亀井  
家に聴因法要は格別の配慮をする旨  
を以前から伝えられていたのである。  
それでも昭陽は自分達は別として、  
五十年忌ということもあり、近親に  
限定した法要を考えていた。それで  
助次郎、太郎次、橋太、甚大夫、大  
生の五人を招待した。

衣非組頭から連絡があり、明後日  
に昭陽の出頭と命じられた。

十三日。王考五十年忌に寺謝三分

金を進呈。また書生十八人に朝饌す  
る。また近隣の交際は晝食を接待、  
崇福寺からの讀經二僧に食菜を供し  
各員に銭百文を布施とした。また書  
生十八人に若松酒を夕食に付ける。  
ほかに近親者の眩臥(義弟山口白曹)  
ほか六名に夜食を出す。これに少栗  
夫の源吾、二女敬も三児同伴で來る。

十四日。朝講後に一昨日、組頭の  
招請による出頭をする。かねて出願  
している鉄次郎結婚の允許である。  
組頭に謝恩を表し下城、帰宅する。  
源吾來り祝意を云う。昭陽も家名の  
繼承を得たことで安心である。

十五日。実姉「妙慶大姉靈位」没  
の六十年を女孫より伝言あり、王考  
遠忌に次ぐ吉符として敬弔を表す。  
天満謙吉、若松酒三升を以て書字  
を乞う。

十六日。昭陽、崇福寺に往き先般  
の法要を謝し、方丈(住職の室)に  
於て美酒を供される。

十七日。瀬戸兵八(書生の父親)  
來り、過般の祖父法要に奠茶一大包  
を供す。莊太郎、草香江蓼を持參。  
十八日。宗(昭陽の末娘)微恙を  
云う。(註)微恙はかるい病のこと。

十九日。書生一同、鉄次郎に酒を  
祝う。松竹梅台に鶴龜を飾る。最寄  
とする。

二十日。隊伍会(鉄次郎が所屬す  
る城代組の小隊をいう)鉄次郎に賀  
酒を送る。伊平、二魚を以て字書を  
乞う。家人、花飾り籠を置く。

廿一日。宰吉郎、賀鯛に酒を添う。  
すべて鉄次郎成婚を祝すためなり。  
国少高(人名か?)束に二吹く金(半  
面をいう)を添え、詩稿に加序を乞う。  
左太夫(鉄次郎の上司)母卒す。

鉄次郎弔いに往く。

廿二日。寅太郎、塾に回り、松島  
酒を持參、与八に二分を貸す。御堂  
方大、蜜一函を供し字書を乞う。

廿三日。松本道琢、加田芽を持參  
する。夜、内人(妻のこと)月を待  
つ、書生大いに舞う。

廿四日。梅雨、空濠(小雨しよぼ  
しよぼをいう)書房に湿風漏る。ま  
た葺瓦の重ね合いが悪いためである。

廿五日。玄冲(南冥と昭陽の弟子)  
から夏物の縮布と縮綿布を妻に送り  
來る。

廿六日。澄心院より孤卿氏に命じ  
られて碯銘を昭陽書を求めるよう要  
請し來る。

廿七日。仲珮三年忌を取越し設いんぎ營  
ことを熊之進より伝言を、少栗云う。

廿八日。熊之進鶴と酒五升、友紀  
鯛送り來れる。権六の主大夫來る。

# 報怨以德

安 陪 光 正

## 落花不尽

波戸場から渡船に乗ると、能古博物館の桜が、朝日に白く輝やっていた。今年は花冷えて風雨もなく、満開が十日余もつづいている。船を下りて博物館への細道を登ると、石段のあちこちに藪椿が散って、上の茂みに小鳥が囀る。さらに登ると、頭上に白い、少し薄緑を帯びた八重の鬱金桜が咲く。

能古博物館だより  
29号  
第29号  
(5) 一般的な雑木の山桜は横には張れないので、まわりの雑木の間を太陽を求めて上へ上へと樹冠を伸ばす。こんな山桜は、雑木林の上に咲くので下からは見えない。山路に散る桜

の花びらによって、それと気付くのである。館内の山桜を仰ぎながら、昔こらに共生していた雑木を切って山桜を残したのだろうと思った。

あたりの樹下はきれいに下刈りされ、石路が若葉を広げ、わらびが頭をもたげていた。今日は、四月十三日の老荘講義の日、少し講義を早めに終わり、館の庭で花見をすることになっていた。

## 以直報怨

今日は『老子』第六十三章で「報怨以德」、怨みに報ゆるに徳を以てす、怨みある者へは徳を以て報いよ、の説明が面白かった。しかし人々は、怨みに対しては怨みを以て報いるのが常で、徳を以て報いることはむづかしい。ついで先生は、『論語（憲問篇）』から孔子の言葉を紹介された。

或人が言うに、

「徳を以て怨みに報いるのは如何でしょうか」と、それに対して孔子は、

「怨みに報いるに徳を以てすれば、

徳に報いるに何を以て報いようか。直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報いたがよい」と答えられた。

老子のような「報怨以德」は一般には困難であるが、「以直報怨」は、直の解釈次第では我々にも納得できそうである。

手元の文献で、

怨・徳・直の解釈を調べると、沢田總清は、怨みを「仇、恩の反対」、徳を「恩恵」、直を「至公至平で私のないこと。即ち義の意。それ故報いる場合もあり、報いぬ場合もある」という。

藤堂明保は、怨みを「他人から抑えられたつらさ、いじめられたうらみ」、徳を「恩恵」、直を「むりに恩を売ったり、意地悪をしたりしない、公明正大な態度」と説く。また直の意味は、「まっすぐと目の会意文字で、まっすぐに目を向けること」を意味するという。



本館下の春草にひろげた花筵にて

また諸橋轍次は、怨みを「理不尽な仕打ち、非道」、直を「公平な判断でその非道に担当する報い」と解釈している。すなわち怨みに軽重があれば、公平に判断して、それ相応に対処するがよいと考えることができよう。

マタイ伝に

「目には目を、齒には齒を」と言われていたことは、あなた方の聞いているところである。しかし、わたしはあなた方に言う。悪人に手回らな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。

この「目には目を、齒には齒を」は、ハムラビ法典による同害復法として有名な言葉であり、怨みに報いるに怨みを以てするもので、「以直報怨」に近い考えであろう。しかし『聖書』では、右の頬を打たれたら他の頬をもさし出せ、下着を取ろうとする者には上着をも与えよ、求め

る者には与え、借りようとする者を断わるな、また敵を愛し、迫害する者のために祈れともいっている。これは「報怨以德」の老子の考えに近いとみることができよう。

これら中国古典については、著名な専門家が種々に解釈しておられる。古典の受け取り方は、人それぞれでよいともいわれるから、私は私なりに考えてみた。文字として表現される古典が、真実をどこまで伝えられるか、その表現には確かに限界があるが、文字によってしか後世に伝達する方法がなかったのも事実である。

#### 松口月城

月城先生は、医師にしてかつ漢詩作家であった。明治十六年、十八歳にして医師免許をえ、七十歳まで福岡の開業医としても地域社会に貢献された。他方三十五歳から久留米の宮崎米城について漢詩を学び、一万余の漢詩を残されたが、昭和五十六年、九十四歳の天寿を全うされた。私は昭和五十一年秋、故倉光正之医師のお世話で、先生御夫妻と料亭「とり市」で一夕を共にし、「以怨勿報怨」、怨みを以て怨みに報ゆること勿れ、のお話を聞くことができたので、思い出すままそれを書いてみ

た。  
「今日ここに持参した半切には、蒋介石総統にさし上げた漢詩を書いています。」

#### 以怨勿報怨 戦戈有此言 大哉蒋総統 正気動乾坤

これは、怨みを以て怨みに報ゆること勿れ、日本が中国でえらく悪いことをしたからといって、怨みを以てこれに報いちゃいけない。戦戈の言あり、戈を収め、これは刀を鞘に収めるという字がこれなんです。戦に勝って戈を収めて、この言葉がある。実に偉大なものです。大なるかな蒋総統、これはこのままで、正気乾坤を動かす、総統の正気は、天地を動かすといった詩であります。昭和二十年敗戦の時、中国にいた沢山の日本軍将兵は、武装解除されて皆丸腰になっておる。ほかに長く中国に住んでいた民間人がある。帰ろうと思っても船がない。日本で待つておる出征軍人の家族たちは、もし中国人が日本人を切ってしまうというような気持ちになったら、生きて帰れるかどうかかわからないと非常に心配した。わしらも非常に心配しておったが、その時蒋総統は、

日本人が中国を荒らしたからといって、彼らを決していじめな。暴を以て暴に報いちゃいけない。怨に報いるに怨を以てしちゃいけないと、軍令を出して厳命した。そのため、沢山の人が無事に帰国することができた。これひとえに蒋総統のお陰である。それで、自分は、総統は実に太っ腹で正義感に富んだ人であると感心しました。その時の総統の精神をたたえて、この漢詩を作ったのですが、あとでそれを、大濠公園にあった台湾領事館の崔領事が帰られるとき、総統にお渡ししてくれと依頼しました。その後、聞くところによると、私のその漢詩が立派な額に入れられて、総統官邸の応接間にかけられていたということで、私はそれを聞いて、また非常に感激いたしました」

#### 花 筵

先生は、このような思い出話をされ、その半切を私たちにも下さった。時に私はそれを床の間にかかげ、今に先生の御温容をしのんでいる。

講義を終えた私たちは、館下の春草に花筵を広げた。館員女性二人が手作りのご馳走を運んで下さる。受講生十二名は福田先生を中心に、島君持参の名酒「上善如水」で乾杯を

する。あたりを見廻わすと、紫のキラン草が群がり咲いて、あちこちに群落を作る。このタンポポは黄色で、すでに呆けて絮を飛ばすものもある。石垣の下にはカラスノエンドウがたくましく柄を伸し、可愛い白紫の花をつらねていた。少年の日の如く春草に坐って、広々とした青空を仰いだ。正面の山腹に、染井吉野がらんまんと咲く。花のトンネルを登ってくる人に、落花尽きずといった風情である。

私たちは難解な老荘の講義を忘れ、おいしい銘酒と館の御馳走に舌鼓をうった。ことに桜の下で採ったという石路の煮物が、春の香をたたえていた。花見がすんで立ちあがると、後の竹藪に孟宗が地面に頭を出している。鋏があれば掘って帰りたいくらい立派な竹の子だった。

講義を聞いている時、老荘がわかったような気になるが、帰りの船の中ではもうわからなくなる。その受け取り方は、その人の力量によるなどといわれると、もうお手あげである。私は今、能古の花筵のまわりに咲く、草花を思い出しつつ、それこそ無為にして自然、求める道は、遠くにあらずして脚下にありなどと思ったりもする。

参考  
昭陽日記と  
亀井塾について

昭陽『空石日記』も本人年齢のせいで字に枯れが目立ち記事も簡略となる。

日記は文政元(一八二〇年)の四十六歳から六十二歳の天保六(一八三五年)九月に至る。

昭陽には壮年期の『烽山日記』のほかに年記類がある。以上は時に政道と民政批判に及ぶ記事も見られるが、『空石日記』ではこれを抑制している。

昭陽に「民政在勤不積不厚……」(民政に在勤するも積もらず厚からず……)これは昭陽の藩下級士としての真情を吐露したとされるが、これらは亀井家実学性・徂徠学の真骨頂である。

日記の書体は、昭陽一流の雄渾な楷書体に始まるが、約五年この書風がつづく。文政六年正月から、昭陽本来の気取りのない自分書体に移る。

天保六年になると字体が細く、枯れたようになる。記事も簡略に移って行く。いずれも昭陽の年齢による思考と体力に歳相応の変化である。但し、大字の揮毫となると堂々の書体を見せる。

晩年の約十年は、ようやく藩も昭

陽に厚く父南冥の藩罰に連累視する印象は全くなくなる。

全国的にも昭陽の学問拔群、当時の儒学者に及ぶものなしとまで評判されるに至る。

これでも藩は昭陽を藩儒に直す氣配を全く見せず、下級士組の城代組に置かれた。藩校「修猷館」を主宰する竹田家当主の学力は益々低下しており、これは修猷館教官等にもよく知られていた。竹田家の家禄三百四十石と藩筆頭の儒者職世襲は固い。それでも竹田派はただ昭陽の存在がおそろしかったようである。即ち学力の違いである。

昭陽は書字の格調も高く、その揮毫は広く好評され、藩内はおろか幕閣の要人にも依頼を受けた。これらは日記の至るところで見られ、昭陽も根気よく揮毫している。

藩は、昭陽に「御書物番頭」に就くことを要請したが、この職務は出仕を要するので、年齢を事由に辞退し、後嗣の鉄次郎(号陽洲)の就任に代えて貰った。これで陽洲は、重用され家老座の祐筆役(秘書のこと)に就くことになる。すべて昭陽の隠忍自重の成果である。

多年、亀井学と亀井家各人の事蹟に関わってきたが、とくに昭陽に関

しては、まったく非とする所がない。時に酒が過ぎる失敗があるが、これも人に迷惑をかけることはなかった。昭陽がこわいののは愛妻「伊智夫人」だけではあるまいか。

亀井塾は通学困難な遠地の留学子弟のための寄宿舎を完備しているが、寄宿生の給食と舎内生活は伊智夫人の宰配による女中達の働きも加わる。これに亀井塾の筋向いの先住人である「染物屋」婆がある。この通称婆さんは伊智夫人の五歳年長で婆と呼ぶ年頃ではない。遠慮もあって本人が自称する「染婆」である。染婆自ら伊智夫人補佐となって亀井書生のよろず相談役を専任のようにして、亀井塾裏方に常勤する。亀井家も準家族の扱いで伊智夫人の別府入湯一ヵ月にも同伴、その他、昭陽の計らいで伊智夫人の芝居見物など必ず随伴する存在であった。

染婆は、亀井書生にもゆき届いた世話をすが、どうかするとピシヤリと説教して遠慮はしない。

少栗の世話もよくした。このため今宿の好音亭にも姿を見せている。とくに少栗の紅児にもなつかれており、このため紅児の死後も花と供物を欠かさず努めていることが、少栗記録に見える。とにかく昭陽一家に

は貴重な裏方や陰の支援者が多い。次に昭陽『空石日記』の書体について当初と最終(四十六歳から六十二歳の十六年間の経過がある)を参考に供する。但し、日記本文の二十五%程度に縮写。どちらも元旦であり、気分を清新にした新年記事の書き出しである。

上段の「乙卯正月」は、文政二年即ち西紀一八一九年、記事中に是歳幽人(昭陽の別号)四十七、以下に内氏(妻のこと)四十三、友也(弟)二十一、敬也(姪)二十、義也(姪)十五歳、鉄也(男)十二歳、世也(姪)九歳、宗也(姪)六歳、脩也(男)三歳と家族全員の年齢を併せて記載する。下段の天保六(一八三五年)は、自分の年齢は記入するが、家族の名と年齢は省略している。

字書の変化は前記にした通りであるが、昭陽年齢も六十三歳となり、家督を相続した鉄次郎が二十八歳。これで昭陽は専ら塾経営にとどまり、専念でき、藩公務は殆ど務めることはない。

ただ昭陽が属した城代組頭の衣井氏からは時々呼び出しがあり、軽い相談を受け、或いは藩重役からの昭陽書を依頼される。

昭陽は天保七(一八三六年)五月十七日

六十四歳で死去するが、その前年の天保六年九月七日に日記記事を止める。これは家督相続した鉄次郎によって「先考日記止于九月七日(父日記九月七日に止む)と亀井家譜に記入されている。

この記事によつて昭陽は死去前の九ヶ月まで日記をつづけていることがわかり、およそ死去前の病臥、または筆記の不自由が推察される。

現存の日記は、天保六年八月四日の記事までで、以後約一カ月の記事紙を欠いている。

◎昭陽自筆『空石日記』

上段は文政二(一八一八年)

下段は天保六(一八三五)年の各年元旦記事部分。縮写率25%

空石日記卷二

乙卯正月

孟原用辰朝在蓆(魚)聞東井有汎水声則進茶起則忠三郎也既味其西井口寒泉念四起也我食水也念五汎井水起之標走俗婦也念六于竈東方漸動雲影清明家人答起烹年餅先獻於洞堂念七魚自元日至十人日神祭于擊鼓盛考祀以二先炊既薦魚也念八檀藥同寮煎煮是歲幽人四十七内氏四十三友也二十之數也二十我也

十五歳也十二世也九歳宗也六歳脩也三歳既念九覽兒女出湯八幡神使我也拜至於夜司城且告以疾疾不能朝賀 宗朝風始起書生東賀賀以乾松魚十枚以稻稊輪之結兩端如倭畫者置度珠插楠蛤鶴葉諸向加村其狀宛于似神畫草衣燕奉持置于前余腹笑其用心之奇之生有詩併我也念十亦答佳既而雪霽之下其寒就之煙而祇覽則林木沙汀答向我也借巾履而余于途亦歸添册四人詩呼諸生飲酒于翠雲亭時忽寒來擗也

空石日記卷之十九

乙未正月

天保六年 六十三歳

元日 若如例 内生蟹酒折五全及蛤升 外生蟹更科酒之升及蛤内生十人 試于直幅三横幅念一

四 午之内生飲 宮橋寺大夫東下五十

二日吉村隆太郎林寺兵衛各飲之朱 八田遠津吉賀美貞各一朱 泉見龍銀信之朱 茂田謙終銀信五朱 大鹽元宗銀信五朱 其藤道正銀 高田吉明酒一升 浦徳水美酒一升

香江春龍方介 大松抄一貫之下

三日小八友也朱賀石茶軍帳之 並徳賀漢鼓

四日横地通順一朱 南鼓正銀 康生酒

五日友也同 築家二百世之文

六日中村乙銀信三 元信美酒 鳥個人通科之升 金子才作酒 好福千子魚子福

七日聖直亭内土 宗是庵至

八日左大夫朱飲度鴨之中 儲也如合高官前

九日登朝未日記之念 守徳虎大所蟹酒之升鮮

## 『空石日記』お読み

いただいた方に

『空石日記』も書き始めは、昭陽の意気込みもあって、注目、関心を持つ記事内容がありました。

ところが日記後半の文政八年頃から記事に低調が感じられます。同年の二月十四日から四月三日のわずか二カ月の短期間に、次弟の大壮(号は雲来)、さらに三日後の同月十七日に長男の義一郎(号を蓬洲)廿一歳を失い、四月三日には甥の山口駒太郎三十一歳が黒田家の江戸藩邸勤番中に死去します。

## よ り だ 博 物 館 古 能

昭陽は、第二で末弟「大年(天地房を号し、文化九年五月に三十六歳で若死)」は十四年前に失っており、次いで二年後に父南冥を亡くしますが、以後は身内の不幸はなかったのです。次弟の雲来は、祖父聴因が一児を僧籍に置くという願望を持ち少年時に臨濟禪宗に就かせ、京都の大徳寺系で雲水修行していました。しかし、元々本人に強固な決心がなく、ついに還俗(僧籍から俗人にかえること)して、専ら昭陽に頼り太宰府で医師を開業。どうやら生計の見込みが立って、亀井家の菩提寺「浄満寺」の娘を嫁に貰って円満な生活を営みます。医業の傍ら書道と漢

字を教え、学塾として地元はもとより、宇美・須恵・甘木など近郷の子弟が集まりました。

こうした医師兼学塾経営で、まだ前途多分とされ、身内の中でも良き相談相手とした唯一の弟を五十歳で失ったことは、昭陽にも強い痛手になりました。

わずか二日おいて長男義一郎の死は心情を面に出さない昭陽にも激甚に過ぎる衝撃であったと思います。

この長男に、昭陽は父親として尽くし難い悔悟があります。その事實は長男の義一郎を同伴した訪問先の材木商で供応を受け、少々酒がまわり、義一郎十三歳が倒れた材木に折脚しているのに即座の処置を誤り不具を招き、これで長男の武士家督を得なくなりました。しかし、義一郎の勉学成果はさらに抜群を見せ、このため昭陽は、たとえ家督は次男鉄次郎に譲るとしても、家学と塾の継承については長男義一郎に決心を固めていました。

次は、山口駒太郎を述べます。

駒太郎の父親は、山口白賈。出身は佐賀藩領の巖木村。地方の名望家で、代々医業、これに学徳信望があり、白賈もよく実家を見舞い、同家は現代まで続いています。

白賈は、亀井南冥の医塾開業すぐに父親に勧められて亀井留学をします。こうした南冥初期の弟子には、満を持していたように秀才と出色の人材が揃っていたようです。このため亀井三賢と称される弟子が早く目され、これは長州清末の国島京山・天草富岡の江上芥洲・肥前巖木の山口白賈です。

国島京山は、長州藩の支藩清末藩寄託生として留學身分のため南冥が塾教育修了後もなお亀井塾師範として一カ年を限って出身藩の了解を得て塾師範にとどめ、この期限後は、すぐ帰藩して清末藩儒となり、以後は着々として同藩の学校教育を確立。これで小藩ながら立派な藩風を確立し、藩政にも良い効果を及ぼしました。江上芥洲・山口白賈については、既にご承知の通りです。

白賈の長男・駒太郎もよくでき、これに昭陽は篤い信頼を寄せていました。福岡藩に出仕すると早くも祐筆役に挙げられて江戸上屋敷勤番になつて出府しますが、着任早々に痲症を患って死去します。この悲報を受けた昭陽は絶句し、しばらくは茫然自失を呈し、日をおいて江戸から詳報される駒太郎死去前後のことに涙に暮れ、最後に駒太郎遺品が送られ

ると、その書物類と簡抜した自習記録には再び強い感動を示しました。

こうした続く三人の死は、すべて前途を有し、昭陽も将来に期するところが多分にあった人物だけに、その落胆も大きかったと推察されます。

こうしたことが、昭陽年齢にも作用して日記記事に低調とされる一面になったと思うのです。

次に昭陽酒量の減退が見えます。

昭陽は斗酒なお辞せず、これに大言壮語と見苦しい酔態を見せることなどは絶対になかったのですが、酔余そのまま寝込むということは日記前半に再三見られます。

酒好きで「相手に酒する」は、その後も再三ありますが、深酒になる傾向は段々減少し、例えば、妻伊智の別府入湯一カ月の間は、夕食に浅酌程度はあったと思われませんが、そのほかの来客との接待酒も殆ど見えません。

また昭陽の健康状態も良く、これも節酒の効果と見えます。信頼する主治医「博多の生民」から飲酒制限を強く勧告されていますが、この節酒励行が自然に減酒をもたらしたとされます。とにかく良い傾向が、現在の昭陽健康として日記に見えるのは喜ばしい観察となります。

亀井南冥と

金印の謎を追って

亀陽文庫客員理事 大谷 英彦

この話は、能古博物館で秋田書店の「歴史読本」を示されたのが始まりです。その雑誌には「志賀島の金印が発見された場所を福岡県土木課が県道設計のため基盤調査を実施したところ金印発見の地点は海であること。また九大による同場所のボーリング調査でも海面で、金印が地上に出る状況はなかったという調査結果が出た」ということでした。

このことについて、博物館の庄野先生は「亀井南冥の金印鑑定に、その出処と誤りがあると再三教えてくれる人もあって私も以前から関心を持っていたが、福岡市が同場所に金印公園を造成されるに至って、あまりとやかく言わないことにしなければならぬ」と考えている」と感想をのべられました。

金印自体は、まぎれもない本物です。問題は金印が本来どこにあったのかにしばらくはります。

「以前、あの金印は今宿にある神社の御神体だったのを南冥が持ち出した」という話を聞いたことがある」

と庄野先生は戦後まもない頃の思い出を次のように語られました。

「敗戦で陸軍省を退職し、福岡市役所の市史編纂室の所長をしていた小野有耶介さんという方は、なかなかの変わり者で九大で国史学を専攻し『陸軍省戦史編纂室勤務』から戦後、福岡市史編纂室担当された。私はよく話を聞きに行っていたが、私に『君は鼠は嫌いか』と、ご自分は弁当のおかずには鼠料理を召し上がっていたのには驚いた。本に埋まるような部屋で、よく見ると鼠取りが隅に仕掛けてある。ある日、その小野さんが朱因を押しした半紙を机上に広げて腕組をされていた。小野さんは、『これは亀井南冥が八雲神社から御神体の金印を借りだす時に神社に借用を示すためにした金印の印影だよ』と私に説明された。

私は、糸島郡青木の八雲神社の側に住んで昔から同宮をお守りしていた『楹正南』さんをよく知っていた。この楹さんは福岡に出る時は、必ず唐人町の私の家でお茶を飲みながら昔話などされたが、小野さんが見せてくれた半紙はその後どうなったか分からない。

この話から私も、同神社と金印印

亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市)・玉置貞正(7)・西島道子(3)・天谷千香子(6)・西嶋洋子(6)・岡村雪江(6)・村上靖朝(6)・星野万里子(6)・岡部六弥(6)・桑形シズエ(6)・田上紀子(6)・安松勇一(6)・上田良一(6)・高田浩二(6)・桑野次男(6)・木戸龍一(6)・原重則(6)・石橋七郎(6)・藤木充子(6)・和田重子(6)・板木継生(6)・行成静子(6)・鬼塚義弘(6)・吉原湖水(6)・中畑孝信(6)・岡洋一(2)・石川文之(6)・橋本敏夫(6)・山内重太郎(6)・都筑久馬(6)・宮崎集(6)・岡本金蔵(6)・三宅碧子(6)・斎藤拓(6)・石橋銀一(6)・三宅碧子(6)・星野金子(6)・西政憲(6)・林十九楼(6)・西村忠行(6)・西川真澄(6)・古賀清子(6)・青柳繁樹(6)・安永友儀(6)・磯崎啓子(6)・織田喜代治(6)・横山智一(5)・上田博(5)・鶴田スミ子(5)・伊藤康彦(5)・坂田泰博(5)・若重二郎(4)・桃崎悦子(4)・大神敏子(4)・石橋清助(4)・塚本美和子(4)・寺岡秀實(4)・奥田稔(4)・原田種美(4)・大山宇一(4)・長八重子(4)・隈川清枝(4)・井上敏枝(4)・葉山政志(4)・川島貞雄(4)・古野剛也(4)・岸洋子(3)・柳山美多恵(3)・長尾茂穂(3)・平河涉(3)・久芳正隆(3)・吉富とき代(3)・半田耕典(3)・武藤瑞(3)・浜野信一郎(3)・墨羊子(3)・荻山雅敏(3)・森本憲治(3)・神戸純子(3)・吉田洋一(3)・黒川松陽(2)・野田はつ(2)・原敬道(2)・前田光男(2)・渡辺美津子(2)・荒谷幸子(2)・前田静子(2)・山田博子(2)・佐藤泰弘(2)・矢富謙治(2)・神戸聡(2)・飯田晃(2)・吉岡克江(2)・岩谷正子(2)・星野玄首藤卓哉(2)・浜崎信也(2)・永岡小正(2)・藤野祥春(2)・熊谷伸吾(2)・川喜代太(3)・林野清(2)・井手俊一郎(2)・増田義哉(2)・田里朝男(2)・吉田一郎(2)・今林法子(2)・江頭藤子(2)・池田修三(2)・黒田喜美子(2)・植藤菊朗(2)・宮嶋熊太郎(2)・前原美子(2)・由比章祐(2)・(大野城市)・伊藤泰輔(6)・田代直輝(6)・執行敏彦(3)・久野敦子(2)・渡辺千代子(2)・坂井幸子(2)・(春日市)・後藤和子(6)・(筑紫野市)・脇山通(6)・川浪由紀子(6)・横溝清(5)・足達輔治(2)・川田啓治(2)

- (太宰府市)・中村ひろえ(6)・佐々木謙(6)・古賀謹二(6)・西尾弘子(5)・平岡浩(4)・野尻敬子(2)・蔵田はつよ(筑紫郡)・結城慎也(5)・(粕屋町)・榎田正己(6)・榎田猷子(6)・青木良之助(6)・神崎憲五郎(6)・松本雄一郎(6)・友野隆(4)・鈴木惠津子(4)・酒井俊寿(3)・長崎榮市(3)・井手加維子(3)・木村和稔(宗像市)・益尾天嶽(6)・上杉秀明(4)・野上哲子(甘木市)・佐野至(6)・酒井カツヨ(6)・黒川邦彦(6)・井手美(6)・井上清(6)・宮崎春夫(6)・富田英寿(朝倉市)・鬼丸元治(6)・山崎エツ子(飯塚市)・小川元治(6)・(浮羽郡)・吉瀬宗雄(6)・(大牟田市)・嶽村魁(6)・古賀義朗(6)・古賀邦靖(2)・西山正昭(2)・(筑後市)・中島栄三郎(3)・(菊田町)・木下勤(4)・市丸喜一郎(2)・片桐三郎(4)・平野巖(4)・市丸喜一郎(2)・(久留米市)・直野陽一(6)・(柳川市)・榊島政信(2)・(直方市)・山本利行(6)・鋤田祥子(2)・(佐賀県)・甲本達也(6)・(大分県)・寺川泰郎(6)・田本政宏(3)・(熊本県)・寺川泰郎(6)・浦上健(3)・(熊本県)・濱北哲郎(6)・(山口県)・大塚博久(5)・(大阪府)・小山富夫(6)・前田敏也子(4)・(滋賀県)・辻本雅史(4)・(愛知県)・杉浦五郎(2)・武内隆恭(2)・(神奈川県)・中野晶子(2)・野崎逸郎(6)・大谷英彦(東京都)・田中加代(6)・片桐淳二(4)・村山吉廣(3)・森久(6)・大島節子(千葉県)・森久(6)・(埼玉県)・間所ひさ(3)・(石川県)・丸橋秀雄(4)・(宮城県)・田中信彦(1)

【協賛会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)⑥・中村登(福岡)⑥
- 笠井徳三(福岡)⑥・菅直登(福岡)⑥
- 早船正夫(福岡)⑥・浄満寺(福岡)⑥
- 永田蘇水(福岡)⑥・沖宏直(福岡)⑥
- 荒木靖邦(福岡)⑥・沖光治(福岡)⑥
- 安陪光正(福岡)⑥・梅田双葉(福岡)⑥
- 広瀬忠(福岡)④・大里豊男(福岡)④
- 七熊澄子(福岡)④・亀井准輔(福岡)②
- 熊谷雅子(福岡)②・富安渡(福岡)②
- 滝栄三郎(福岡)②・上田満(福岡)②
- 小田一郎(福岡)①・石橋観一(福岡)①

能古博物館だより

影を冥見するため現地を訪ねて事実を確認しています。以来、三十年に  
なりませぬ」

戦後間もない頃の若き庄野寿人と  
「変わり者」史家との交流。それを  
聞く私の胸にも感慨がよぎりました。

専門家によれば、アオキという朝  
鮮語は「高貴なもの、偉大なもの」を  
見る時に発する嘆声」だそうです。

となると、どうやら金印の謎を解く  
鍵は八雲神社にありと感じ、三十年  
前の庄野先生の古い記憶を手掛かり  
に今宿に向かいました。

今宿を出て右へ行き、踏切を渡り  
三菱電機の工場沿いに南へ歩くと目  
下工事中のバイパスの向こうは福岡  
市西区今宿青木。字こそアオキが登  
場して来て、近くに梟の保存木に指  
定された「もちの木」の巨木もあり  
ました。

八雲神社の入口の石柱には天保の  
刻字があり、神社の由来を記した絵  
馬によっても古い歴史を持つ郷社で  
あることがうかがえました。

珍しいと思っただけ境内の「日露戦  
役従軍碑」と「シベリヤ出兵記念碑」  
でした。戦没者の碑は各地でよく見  
ますが、この石碑は出兵従軍し帰  
艦した人達の勲位、氏名が年齢順に  
刻まれていて、最後部に亡くなった

数人の名がありました。

「俺たちは戦地に行って戦ってき  
たぞ」と胸を張っているような記念  
碑でした。

庄野先生の記憶どおり神社の左隣  
に「檜俊策」という表札の家もあり  
ました。庭に御霊屋の社殿まであり  
由緒をしのばせました。呼び鈴を押  
すと上品な奥様が出て来られ、やは  
りそうか！と感じ入る話がいくつか  
聞きました。

「檜」という姓は宮崎県の南郷村に  
何軒もあります」

南郷村といえば、百済滅亡で多く  
の貴族が亡命して来て、現在もその  
祭りや風習を残していることで有名  
な村です。

「福岡市役所にいた小野は、私共  
の一族で、親類の間でも有名な変わ  
り者でした」

「私の祖父小野鴻之助は玄洋社の  
頭山満さんのもとで働いていました」

「家が頭山さんの家の隣で、曾祖  
母は頭山さんが小さい時、膝に抱い  
てニッキ・飴を食べさせたとか話し  
ていました」

ここまで聞いて私は思わず唸りま  
した。亀井南冥以下の亀門の人達が  
真藤慎太郎を通じて亀陽文庫・能古  
博物館↓庄野寿人につながると同じ

- 南 誠次郎(春日)⑤・木原 敬吉(飯塚)⑤  
具嶋 菊乃(甘木)④・坂田貞治(甘木)①  
大久保津智夫(嘉穂)⑤・庄野 直彦(直方)④  
原田 國雄(宗像)⑥・森光英子(久留米)③  
西喜代松(北九州市)⑤・永井 功(北九州)②  
花田加代子(遠賀)③・本村 康雄(三池)②  
中山 重夫(唐津)④・緒方 益男(佐賀)⑥  
七熊太郎(佐世保)⑥・七熊 正(佐世保)④  
浦上 健(長崎)②・田中 貞輝(愛媛)④  
小堀 定泰(滋賀)③・伊藤 茂(神戸)③  
西村 俊隆(東京)⑤・白水 義晴(東京)⑥  
早船 洋美(東京)①・翠川 文子(埼玉)②  
石野智恵子(東京)④・多々羅幸男(千葉)⑤  
江崎正直(東京)⑤
- 会員ご氏名に⑥は、会費ご継続六年目をいた  
だいたるしです。(〇)は多年分のまとめお  
払い込み、( )は増口数ご負担を示します。
- 【法人協賛会員および特別協力法人】
- 九州 電力 株・大野 茂(福岡)  
株 新 出 光・出光 豊(福岡)  
株 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)  
株 福岡中央銀行・山本勝一郎(福岡)  
株 医療南川 整形外科・南川勝三(福岡)  
株 日本製粉福岡工場・白尾嘉弘(福岡)  
株 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)  
株 流通 共 済 株・花田積夫(福岡)  
株 タイム社印刷 株・安部博満(福岡)  
株 笠 組 笠 忠夫(福岡)  
株 博多ちくわ 株・魚嘉・松尾嘉助(福岡)  
株 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)  
株 協 通 配 送 株・平野孝司(福岡)  
株 大牟田運送 株・本村康雄(福岡)  
株 三島設計事務所・三島庄一(福岡)  
株 日 西 物 流 株・原 重則(福岡)  
株 西日本急送 株・原 重則(福岡)  
株 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)  
株 東洋特殊機工業 株・西尾敏明(福岡)  
株 西洋トラック運送 株・西尾秀明(福岡)  
株 南愛光ビルサービス 株・野田和禮(福岡)  
株 南クリーン開発 株・野田和禮(福岡)  
株 延 寿 産 業 株・池田邦夫(福岡)  
株 九州三菱そう自販株・宮崎慶一(福岡)  
株 南安河内商所・安河内紀男(福岡)  
株 木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成八年七  
月三十一日現在)は、右の地区ごとに  
記載いたしておりますので、何卒御芳  
名を御確認下さい。

友の会 年間3千円  
館の活動、館誌購読と催事企画に参加  
自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
〃 (法人)年間3万円  
館維持、資料収集、施設整備等の資  
金援助を受ける

納入方法 郵便振替 0173019160970  
財団法人 能古博物館  
右の会費受領は、その都度本誌に掲載  
以後会費相当期間を名簿にします。

【図書出版】

『閨秀 亀井少栗伝』 詩、書、  
で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少栗。  
しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌である。  
これが同女の作か否か。これに始まる探究  
の書である。

B5版・表紙布装美本  
限定二、〇〇〇部  
図録全カラー50頁・本文94頁  
直売頒価 三、〇〇〇円(送料 三〇〇円)

『江河万里流る』 九大はもとよ  
り東洋諸国の  
大学教授はじめ、中国哲学専攻又は愛好同  
士によってさらなる孔子学の歴史と精神が  
集約された寄稿三十一名の論文集大成とし  
て貴重な文献、また、平易に親しめる儒学  
精通書。

B5版・本文328頁  
限定二、〇〇〇部  
直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

ように、金印↓亀井南冥、八雲神社、  
櫛 正南、頭山 満、小野鴻之助、  
真藤慎太郎、玄洋社…という連環が  
見えるのではありませんか。

庄野先生にお聞きしますと、  
小野さんの祖父で頭山満さんのも  
とで働いておられたという小野鴻之  
助さんは、玄洋社が陸軍に要請され  
た満州義軍の編成に幹事を努められ  
た方で、これに真藤慎太郎も参加し  
ました。小野さんは義軍の現地活動  
中に露軍の銃弾を左膝関節に受け、  
左大腿部を切断される。なお晩年ま  
で玄洋社幹部として永く勤められた  
方です。

いずれにせよ、あの金印が、黒田  
の殿様に献上され、亀井南冥が「後  
漢書」に照らして金印の由来を説明、  
これが「筑前に亀井南冥あり」と全  
国に名をとどろかすことになったの  
は、歴史上の事実です。

その影に「儒侠」と呼ばれ「狂死」  
したとさえ言われる亀井南冥の人間  
くささが、私にはたまらないのです。  
その魅力をさらに追い求めて、もう  
一度庄野先生と一緒に奥さんをお訪  
ねすることを約してお宅を辞した次  
です。

その顛末はまた次号に載せていた  
できます。

### 「植物画のこと」

元木 敏博（植物画家・講座講師）

●人間が四季折々の花に関心を寄せ初め  
てから、どれくらい時間が経ったので  
しょうか。花を美しいと思ひ、更にこれ  
を絵画に留めおきたいとする心情の起こ  
りは、一説に依ると、そう驚くほど大昔  
のことではないらしいのです。例えば、  
磁器の文様に草花が登場するのは古代エ  
ジプト時代からであり、アルタミラ洞窟  
などの壁画に

は、動物は描  
かれていても  
「花」は描か  
れていないよ  
うです。縄文  
土器にも同じ  
ことがいえる  
ようです。  
●このような  
経緯からする  
と、草花が人  
間の意識の中に登場するのは、やはり  
「衣食足りて…」の名言のように、先ず  
胃袋が満たされた後、脳味噌を満たす段  
階に到達してからのようです。つまり、  
その時に至って突然、人間の視野に花が  
「見えはじめ」てきたのです。

●その「見えはじめた」草花をどう取り  
扱うかは、歴史の中の人間の目的意識、  
或いは時代精神とでも言いましょうか、  
そうしたものに従いながら行われてきま  
した。



アザミ

草花は、先ず、病を癒  
す「薬」であり、それは、  
文字通り、「(薬) 草で  
(苦痛を) 薬にする」た  
めのモノでした。

●時代が進み、草花をただ見て楽しむだ  
けの肉体的、精神的、経済的な余裕が人  
間にもたらされる時が来たのは、人間の  
歴史からすれば、ほんの最近のことにし  
か過ぎません。未だに、「花を楽しむこと  
は無縁の人々が多数存在するという現実  
も忘れてはならないと思います。

●さて、「植物画」に話題を進めますと、  
この起こり  
は、西洋の薬  
草学、東洋の  
本草学の挿絵  
に由来するこ  
とはあきらか  
で、また、そ  
のあと起こつ  
た植物学の分  
類、研究に必  
要な挿絵(イ  
ラストレーシ  
ョン)でした。当時は、写真のない時代  
でもあり、当然、間違いの無いように細  
密な描写が要求されたわけですね。

●このことは、同時に、植物画の定義に  
もあてはまることで、①植物学(分類学)  
的に、「正確」でなければならぬし、  
②「美的」でなければならぬという二  
大原則があり、さらに、一般の花の絵と  
は異なり、ある特定の植物がテーマであ  
り、それとは無関係な芸術的技巧は不要  
であるということです。具体的には、一

画面に、一種類しか描きませんし、パッ  
クも不要です。ただ、ひたすら描こうと  
する植物の本質に迫り、結果的に美しく  
見れば更によいのです。当然のことと  
すが、自然の美しさを再現しようとする  
人間のささやかな目論見が成功するか否  
かは描く人の腕次第でしょうが。  
●日本でも、最近、所謂「ボタニカル・  
アート」が静かなブームとなつていま  
す。これは国民全体として漸く、精神的、  
経済的余裕が出てきたことと無関係では  
なさそうです。こうした中、自分で植物  
画を描いて人生に潤いを与えたいとする  
人々が徐々に増えつつあることは歓迎す  
べきことです。

●当博物館では、植物画の入門から指導  
する講座を開設致しました。どうか植物  
画を楽しく学び、能古島の自然を楽しん  
でいただければと思います。

#### ・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881